

保育者の実践研究を支援する際に考えていたこと

杉村 伸一郎

My thoughts on supporting the practical research of kindergarten teachers

Shinichiro SUGIMURA

保育者が実践研究に取り組む際に、何を思い考えたのかに関しては、既にアンケートやインタビューが行われ、論文や報告書としてまとめられている。そこで、ここでは、保育者の実践研究の支援に関する振り返りを、研究者という立場から行う。

主体的に研究する 初めに思ったのは、保育者が主体的に研究することを支援しよう、ということであった。大学生や大学院生、そして教員ですら、主体的に研究することは難しい。独自性を求めすぎると、独りよがりの研究になる可能性がある。かといって、既存の研究を参考にしすぎると、型にはまった研究になりがちである。ある学問の理論や方法を学び、学会などの組織に属しながらも、自分らしさを発揮する、というのは、幼児期において「私は私」と「みんなの中の私」のバランスを取りながら成長することの延長線上にあるようにも思える。

大学生や大学院生の場合、専攻した学問の枠組みの中で研究しないと評価されないが、保育者の場合、特に研究に初めて取り組む場合は、最初に「みんな」を意識すると、枠に取り込まれて実践研究のよさが失われる恐れがある。そこで、最初に、各自の現場や実践に根ざした疑問を言語化してもらい、その部分を深めるようにした。その際、保育者の多くは、研究に対する不安が高いように感じられたので、まずは、安心感や自信をもって研究に取り組んでもらえるよう、保育者の発言をできるだけ肯定的に受け止め、考えや意見を認めることを心がけた。そして、その先に、実際に絵本を作る、劇で発表する、といったことが生まれた。

思考を支援する 次に思ったのは、研究がう

まく進まない時には、進むべき方向やその選択肢を示すといった、具体的、直接的、誘導的な支援はできるだけ行わないようにしよう、ということであった。実際には、保育者相互の議論を見守るようにし、行き詰まった時にだけ、言葉をかけるようにした。その言葉の多くは、保育者が議論の中で使った言葉で、私が反復することにより、保育者自身の思考が明確になり働きやすくなるよう心がけた。その際は、保育者の問題意識を安易に既存の学問用語に置き換えないように気をつけた。また、考えていることをうまく言葉にできない場合には、グループで話し合う、観察記録を取る、KJ法を行う、といったことを勧め、個人内で思考が空回りしないようにした。

実践研究による変化 研究を行うことにより、何らかの研究上の成果が得られる。それ以上に私が期待していたのは、実践研究を通して保育者が成長すること、その中でも特に関心があったのは、省察機能が向上することであった。この期待には、当時、私が保育者の省察に関する研究を行っていたことも影響しており、以下のようなことを想定していた。

保育者が子どもを理解する場合、子どもに働きかける立場からは一人称的であり、子ども側に視点を置くと二人称的であるので、日常的には、自分や子どもを客観的に眺める三人称的な視点をとり省察することは難しいだろう。現在、省察を促進するものとして保育カンファレンスが注目されているが、それと同様の効果が実践研究にもあると考えられる。それは、問題の設定から始まり、方法、結果、考察と続く研究の一連の過程では、常に三人称的な視点からの思

考が求められるからである。実際に、今回のプロジェクトの成果をまとめた論文や報告書を見ると、実践研究が自分の保育を振り返る契機となっているようである。

今後の課題 保育者の実践研究を支援する際に私が考えていたことは以上のものであるが、最後に、現時点での反省を1点だけ述べたい。

それは、省察機能の三人称的な側面に重点を置きすぎていた点である。理解のモードで言えば、説明的な理解を重視し、了解的な理解を軽視していたことになる。今後は、一人称的もしくは二人称的な子どもの理解を深めていけるような実践研究も支援できる研究者を目指して行きたい。